

まざりあう集合住宅

——異なるものと個が共鳴できる環境
第17回 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾 × 乾久美子 × 藤本壮介 × 堀井規男

今年で「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」は第17回を迎えます。コロナ禍による社会の変化や地球温暖化をはじめとする気候危機の高まりを受けて行われた前回の第16回「循環する集合住宅」では、環境負荷やサステナビリティはもとより、もの・人・エネルギーを含めたさまざまな存在の循環を考えることで環境に応える新しい可能性を模索できる集合住宅を提案してもらいました（応募数184点、登録数368件）。今回は、美学者の伊藤亜紗さんにゲスト審査委員として参加していただきます。開催に先立って、今、集合住宅を考える上で一体どんなことがテーマになり得るのか、私たちが集合住宅を通していかなる問題に取り組むべきなのか、審査委員の方がたに話し合っていました。（編）

多様な存在の循環を考える

——前回の課題は「循環する集合住宅」でしたが、振り返ってみていかがでしたか？

隈 ゲスト審査委員の宮田裕草さんがよく建築を理解してくださっていましたね。「循環」だからといって説教臭いサステナビリティに走ることなく、クリエイティブな案が多く集まったと思います。

乾 特に最優秀賞や優秀賞は単なる自然素材ではなく土地における資源を自分で定義していた点が印象的でした。人の振る舞いや生活の文化を

る種の資源と捉えるアイデアは非常に面白かったですね。

藤本 「循環」はまさに今後重要になる概念です。もっとこの概念を育てていく必要があると思います。若い方がたがさまざまな観点から循環を捉えなおしているのは面白かったです。他方でもっと正面から自然と向き合う案があってもよかったのかなと思います。実際の建築設計でも自然との関係は今後ますます問われていくことになると思いますから。

堀井 最優秀賞が提示していた循環の捉え方やアイデアは面白かったですね。実際にわれわれの取り組んでいる開発とも直接的に繋がるものだったと思います。

隈 循環はさまざまなスケールで捉えられるもので、建築物単体のサーキュレーションを考えてもいいし、資源やエネルギーも含めた建築というフレームの中の循環を考えてもいい。すごく深く掘り下げられるテーマであると同時に、目の前の課題とも向き合う必要のある面白いテーマでした。

シェア、ソーシャル・ミックス、多様性

——それでは、今回はどのようなことをテーマとして考えていくべきでしょうか。

隈 これまでの集合住宅を考える上で「シェア」は大きなテーマだったと言えるかもしれません。特

に日本はマンションの分譲モデルに沿って集合住宅が画一化し退屈になっていく中で、新たなライフスタイルの選択肢としてシェアの概念が注目されるようになった。普通のシェアハウスももちろん普及しましたが、住宅のどの部分を社会とシェアするの、社会と住宅の関係性を考える重要性も高まっている。コロナ禍を経て、再びシェアを問いなおすタイミングが来ているかもしれません。

乾 隈さんの指摘とも繋がりますが、これまでの課題で「ソーシャル・ミックス」が問われる機会がなかったように思います。海外の公営住宅は所得の異なる人びとがまざるようなプログラムを設計していますが、日本だと公営住宅は比較的低所得層向けなど所得に応じて住宅が供給されている。集合住宅の供給方法とそこに入っている家族像が固定されているのが日本の特徴だと思います。ヨーロッパなどでは富裕層が利益を社会へ還元するという社会通念がありましたが、近年グローバリゼーションにより富を蓄積した人々の中にはお金を社会へ還元させようと考えない人もいる。こうした異なる層がまざりあわない状態は社会としても不健全だと思うんです。

藤本 おふたりの話を聞いていて、「多様性」がますます重要になっていくと感じました。乾さんの指摘したソーシャル・ミックスはまさに多様性の共存ですし、隈さんのシェアも都市や建築がどう多様な生活を受け入れるかという問題です。このコンペでは第13回に「多世代、多国籍で生まれ変わる集合住宅」というテーマを設定していましたが、今

ももっと正面から多様性に向き合う必要があるのだと思います。貧困はもちろんのこと、ジェンダーの問題など「多世代」「多国籍」ではすくいきれない多様性がありますから。2025年に行われる大阪・関西万博においても多様性は重要なテーマです。最近もジェンダーレストイレが話題になるなど、社会の関心も高まっていますよね。

堀井 面白いですね。単に共用スペースをつくったり異なる人びとが集まる場を設けたりするだけではなく、多様な人びとのまざりあいを後押しするようなアイデアがあると刺激的ですね。

AI時代に問いなおされる建築の価値

堀井 去年から今年にかけての変化を考えると、ChatGPTや生成系AIが急速に注目され、人の暮らしや働き方に大きなインパクトを与えるようになり



隈研吾氏.



乾久美子氏.



藤本壮介氏.



堀井規男氏.

ました。住宅のあり方を考える上で、こうした変化のスピードを考えておく必要がありますよね。

隈 ぼくたちもMidjourneyのようなAIの活用を進めていますが、変化のスピードは面白いですよ。

藤本 デジタルテクノロジーと比べると建築の変化はゆっくりしていて、もはや時代の最先端とは言いがたい部分もあります。他方で引き続きわれわれの生活環境を支えているインフラでもあって、最先端ではないけれど重要な役割を果たしてもいる。情報社会がどんどん肥大化していく中で、リアルな空間の中で人間を関係づける建築の役割は必然的に重要になっていくと思います。

堀井 デジタルテクノロジーが急速に進化していくからこそ、リアルな空間の重要性も高まっていく。

藤本 建築が扱っている情報はとてつもなく多いですよ。ある程度のところまではAIを活用できると思うものの、複雑な情報が絡み合っている最後の建築的統合を行う部分は建築家の職能が問われる部分だと思います。

隈 AIはすごく便利な「道具」ですよ。ほとんどの退屈なものはAIでつくられるようになってきた。先日トーマス・ヘザーウィックが来日して対談した時も、都市がAIを使った発想でつくられる中で、これからの建築はヒューマナイゼーションをすることがいちばん重要だという点で考えが一致しました。

乾 既存のアイデアを組み合わせるAIはツールとして便利ですが、身体を持っているからこそ生まれる想像力もあるでしょう。AIが身体性を持たない限りは人間を感動させることは難しいのかもしれませんが。既知の情報をAIで組み合わせで最適化した効率化したりするだけではなく、リアルな空間の中でどうすれば多様な人びとが共生できるのか問われているのだと思います。

個性が共鳴しながら「まざりあう」空間

堀井 みなさんのお話を伺っていて「境界」もひとつのテーマになると感じました。建築をつくることは境界をつくることでもありますが、境界がなくなることで今の暮らしがどう変わるのか個人的にも気になります。

藤本 シェアの意味もパブリックとプライベートの境界を問うものですし、多様性の問題もフィジカルな境界や心理的な境界と繋がっていますね。

隈 でも「シェア」という言葉をそのまま使うと

シェアハウスのようなものに引っ張られてしまうので、別の言葉を見つけたいですね。

堀井 「まざりあう集合住宅」はどうでしょうか。シェアも多様性もまざりあうことですよ。社会の多様性を担保していく上で必要不可欠なインクルージョン（包摂性）も、いろいろなものを受け入れてまざりあいながら新たな個性やコミュニティを生み出していくもので重要ですよ。

藤本 前回のテーマだった「循環する」から「まざりあう」へ——循環しているからまざりあうとも言えるし、繋がりもあって面白いですね。でもまざりあった結果が均質的なものになってしまうのではなく、個をきちんと残しながらまざりあうような状態をつくるのが大事ですよ。多様なものを受け入れてもすべて同じものになってしまうたら、かえって多様性は失われてしまう。個性を残しながら共鳴が生まれていくのが理想的です。

乾 面白いですね。具体的な空間を考えてみても、かつては団地の中には公園もつくられていて、暮らしの中に遊びのための空間が設けられていましたよね。生活する空間の中にエンターテインメントやウェルネスが組み込まれていることもまた、「まざりあう」例ですよ。

隈 「まざりあう」という言葉はいろいろな解釈が

可能だし、面白いですね。

乾 ゲスト審査委員も建築だけではない視点から自然にまざりあうような方がいいですよ。たとえば美学者の伊藤亜紗さんは身体や障害の研究をされていて非常に面白いですし、ご自身の専門にとどまらずさまざまなフィールドで活躍されている印象を受けます。

藤本 ぼくはお会いしたことがないのですが、すごく面白い方だと思っていました。

隈 いいですね。敷地も周辺の状況がいろいろまざりあった場所の方が面白そうですね。たとえば都心にある準工業地域はまさにまざりあう場所で、いいんじゃないでしょうか。

堀井 われわれの事業としても可能性を感じる領域ですね。敷地面積は1,000㎡、容積率300%、戸数は50戸に設定しましょう。

乾 多世代や多国籍、あるいは所得格差はもちろんのこと、ジェンダーやエンターテインメントなど、さまざまなものへ想像を広げながら「まざりあう集合住宅」を考えてもらいたいですね。

——それでは、第17回のテーマは「まざりあう集合住宅」、ゲスト審査委員は伊藤亜紗さんに決定します。

(2023年5月29日、長谷工コーポレーションにて
文責：本誌編集部)

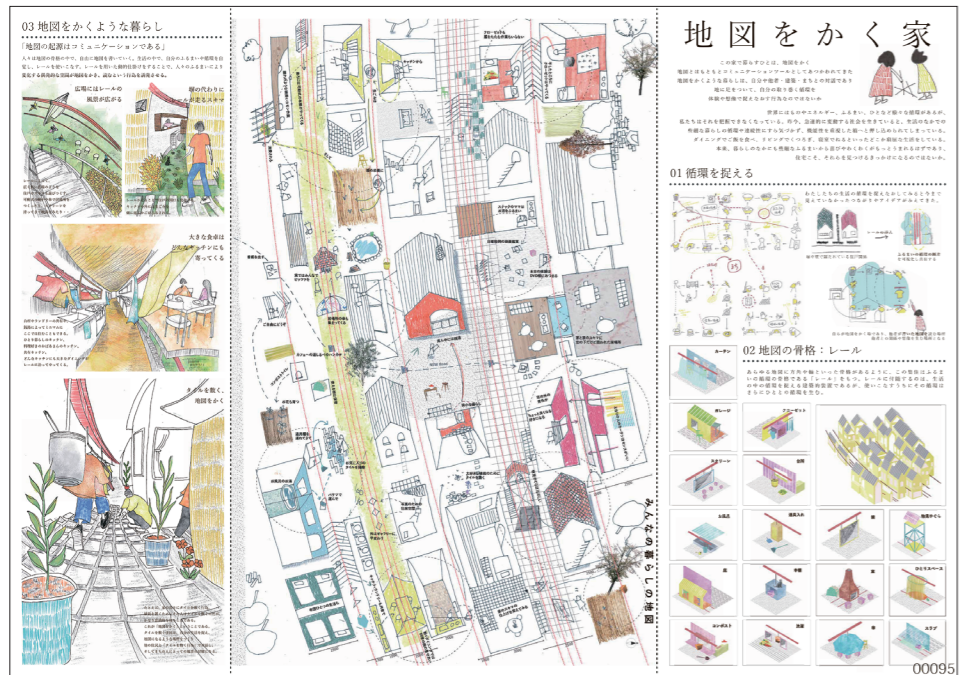
テーマについてゲスト審査委員の伊藤亜紗さんからのコメント

私は準工業地域で育ちました。近所にはドロップをつくる工場があり、その前を通ると、いちごやメロン、あるいはハッカと、曜日ごとに異なる匂いがしていました。実家の隣は自動車部品の下請け工場です。平日はいつも「ガチャン」と鉄板をプレス加工する規則的な音が響いていました。小学校の横には半導体をつくる巨大プラントがあり、門の前では不当解雇されたと主張する元従業員が毎日辻立ちして、フォークギター片手に自作の歌を歌って抗議していました。今思えば、いろいろな騒音や化学物質、政治的な主張が、敷地の物理的な境界を越えて外に漏れ、まざりあう空間であったなと思います。そのまざりあいは時に不快で危険でだらしないものでしたが、異なるものの存在の気配を感じながら生きることを可能にしていました。今回のコンペティションのテーマを聞いた時、そこに潜む「やっかいさ」のニュアンスにむしろ惹かれま

した。時代の大きな流れは「分けて、管理する」「絶対に、漏らさない」方向に向かっています。「まざるな危険」なのです。なぜ時代がそのような方向を志向するのか、そこには理由があると思いますが、しかし同時に私たちはそのことがもたらす弊害も感じています。暮らしはずっと続いていくものです。きれいで終わる「まざりあう」はつまらない。そのやっかいさの中から生まれる新しい可能性を、みなさんと一緒に考えてみたいと思っています。



伊藤亜紗氏.



第16回「循環する集合住宅」最優秀賞作品
「地図をかく家」木嶋真子 福原直也(法政大学大学院)